
山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター センターだより 第124号(通巻第191号)

2014年2月12日 発行
山梨大学教育人間科学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/>

■ 他大学視察報告「弘前大学教育学部」

県外他大学の視察で弘前大学を平成25年10月に訪問しました。附属教育実践総合センターを核として学生の現場感覚を鍛える様々な実習が行われていました。特色ある実習は3年次の「Tuesday実習」と4年次の「学校サポーター実習」です。以下にその詳細を報告します。



教育学部校舎



入り口の看板

1. 聞き取り及び協議内容

①教員養成における入学時から卒業までの実習に関する内容について

<1年次：教職入門>

- ・ 学生が大学に来て教職をめざす。その入門期の体験。まずは学校に行って子どもを見る。
- ・ 協力校（一般校に）をお願いしての観察実習。
- ・ 開始当初は教委や校長会と相談した。今は小中学校でローターをくんでいる。中学校1校、小学校2校が該当。弘前大学から自転車で行ける範囲の学校。タクシーを使った時もある。中学校は、毎年弘前第三中学校で受けられている。
- ・ 約200人の学生が3校に別れて各学級に入り、小学校や中学校に行く。服装、頭髪などの乱れについては徹底した指導をしている。服装等が悪く門前払いの対応をしたこともある。
- ・ 1年次であっても指導をきちんとすると学校に入るこのような取組も実施できる。

< 1年次：介護等体験実習 >

- ・教育実習関連の科目として捉えている。
- ・本学では単位にしている。証明書を出して原本は保管している。
- ・全課程の学生が受けているわけではなく、特別支援専攻と幼稚園、一部高校が受講。

< 2年次：学校生活体験実習 >

- ・附属学校園で行っている。小学校と中学校をそれぞれ主免、副免として2つの校種を観察する。
- ・集中実習である。小学校、幼稚園の場合、子どもたちの様子を1年次より深く見てもらいために、運動会などに参加して観察や、学校の仕事を体験させている。
- ・これは選択科目であるが、かなり積極的に学生には働きかけている。（ほぼ必修に近いような働きかけをしているようだ。）

< 3年次：集中実習 >

- ・附属学校園で行われる。一般的な教壇に立って授業を行う一般的に行われている教育実習。

< **3年次：Tuesday実習** >

- ・附属学校園で行われる。集中実習の前後に実施。毎週ではないが、学校に午後から行って教員の様子や児童生徒の様子を観察して前半は集中実習の準備を行う。集中実習後の後半は集中実習の省察などを行う。
- ・卒業要件の必修科目。他大学にはない取組である。
- ・この3年次の二つの実習をもって卒業の単位数と見なしている。
- ・火曜日の午後、この実習担当の大学教員（協力教員）は授業を入れずに、附属学校園に行くようにしている。

< 4年次：研究教育実習 >

- ・選択科目である。参加数に波はあるが、かなりの数が参加している。
- ・次に説明する学校サポーター実習を連動した一連の実習を4年生で行っている。

< **4年次：学校サポーター実習** >

- ・今から9年前、1年生から4年まで縦断的に考えようという事業検討WGを作った。
- ・年間20校の弘前市内の協力校で学校のサポーターとして現場経験を積み、サポーター経験の間に教壇に立って授業をする上記の研究教育実習を行っている。
- ・サポーター実習と研究教育実習は一体で、協力する教育委員会（弘前市、黒石市、平川市、青森市）と協定を結んでいる。広範囲で様々な所に行けるようになっている。
- ・学生をはめ込むところが苦勞している。教務系の協力がある。
- ・3年次の主免実習で行った校種に基本的には行く。他校種の希望もあるが、そのような時は面談できちんとできるような配慮がある。

* 1年間の流れ

- ・連絡協議会で協力校に説明（4月当初）

- ・学校訪問（4月中旬～下旬）初回打ち合わせと本学の協力教員で出向く。ほぼ全教員が行く。別紙の通り相当数の先生方がサポーター実習に参加している。負担は大きい。表の協力校実習グループがそれにあたる。
- ・サポーター実習開始（5月）全部で5期に分けている。各期ごとに教員が出向く。それぞれの期で省察検討会を行い、次の目標をもたせ、事前指導を経て研究教育実習に入り事後指導を行い更に4期、5期のサポーター実習と省察がある。年間20回実施。
- ・協力教員が窓口になってサポーター実習が行われるが、研究教育実習は各講座の主任が巡回指導にあたっている。
- ・終了後、連絡協議会を開催して次年度に生かしている。
- ・実施体制や連絡体制の緊急対応マニュアルがある。連絡体制の一本化を図っている。
- ・学内の教員の指導マニュアルについて作成している。

<これらの実習全体を通して>

- ・一覧表の教育実習等実施計画の説明。
- ・年間の教育実習の日程表も参照。
- ・観察体験（1，2年）→参与（3年）→実践（4年）これが4年間を貫く弘前大学の考え方。4年次の実習は本当の教員としての心構えを教えてもらうようお願いしている。
- ・何らかの問題を抱えて実習ができない学生のために「学習支援部門」という割り振りもある。
- ・実践センターが核になって、すべての先生方が、「教育実習部門」「実践演習部門」「学習支援部門」などに割り振られて仕事をしている。（学生の教員になるために道筋に大学の先生方が一枚岩になって取り組んでいる様子がわかる。）
- ・各実習に大学教員が学生を引率する場合、質の確保のために、それぞれの実習でマニュアルを作って大学の担当者に配布している。

②学生の教育現場体験が重視されているが、実習やボランティアについて

<教育現場でのボランティア>（教育委員会との連携・単位認定・活動中の指導等）

- ・別記「地域コラボレーション実習」で今年度より実施。

③就職支援について

- ・3年の前期に業者、後期は各県の説明会を行っていただく。各県の中では岩手県、秋田県が東北地方では求人に来るようになった。
- ・4年時学生を対象に、関東一円の県から説明に来てくれている。
- ・6月に教職対策対策講座（教職支援室主催）を実施。
- ・受験への経済対策の支援として関東を受験する学生には支援バスを出している。
- ・「教職のとびら」P63参照。就職支援室の先生と学生の体験を入れた冊子になっている。
- ・採用状況は、教員希望者が全員教員になっている。公務員、企業も含めて94%の学生が就職。仲間を作って勉強することが効果的。教職支援室をいかに活用したかが合否にかかわっている
- ・仲間とともに教職支援室を活用している学生が伸びる。教護教諭を例にとると7名のうち教職支援室を使った4名は合格し、使わなかった3名が不合格。明暗を分けている。

④教職支援室（昨年2名、今年は3名のアドバイザーが常駐）

- ・1次合格120名。2次は60名に届くか、70名までまで伸びるかという状況。
- ・現在3名のアドバイザーがいる。元小中学校の校長。中学校出身1名、小学校出身2名。
- ・月曜から金曜まで勤務，10時から5時まで勤務。できるだけ常駐することを心がけている。学生は自分の時間割をぬってあいている時間を予約する。
- ・小論文，模擬授業，など予約表に記入して指導してもらいたい内容を入れる。論作文などは添削をしている。予約時間に入って個別指導を受けている。90分を2コマに分けて実施する場合もある。受験県ごと，校種ごとにグループを作って指導を受けたいジャンルごとに対応する。
- ・添削よりも学生とのやりとりに時間を取る。現場の経験を入れて学生の指導に当たる。一人で平均12から13本小論文を書く。経験によって上手になる。その後集団討議と面談を行い，多くの学生が利用している。
- ・模擬授業も多い学生で10回以上。最初は授業にならないが少しずつできるようになる。5回目くらいから上達し，10回を越えるとものになる。
- ・教員になりたい，なろうを「なる」になるように指導している。
- ・集中講義で観察に行くときに（1年次）最後の日に質問を書かせて学生の質問に直接答えるようなこともやっている。大学の教員と違ってかなり現場感覚の話をしている。



左が教職支援室入り口，奥に模擬授業室が3部屋ある



このタイプの部屋が3箇所ある

<実習と支援室のかかわり>

- ・支援室での指導を受けてサポーター実習に行く。3年次の実習は附属学校園，4年次のサポーター実習は協力校に行くので，ある程度の質を担保したい。支援室で鍛えられ，サポーター実習先でも評判がよい。

<ここまでの協議>

Q：学生のデータを取っているか

- ・教職入門から始まってそれぞれの取組をファイリングさせている。
- ・支援室では来室した学生の情報は共有するが，その情報を学部の先生と共有するまでは至っていない。

Q：自分のことを自分の言葉で語るために

- ・教育学部の学生はまじめ。まじめな学生ほど成功体験に持って行けるか不安を感じている。これは思いであって体験で実感に変わる。この不安を払拭するための取組を行っている。保護者にあってもいないのに不安がっている学生。この不安を払拭のために元気づけ。経験不足からの不安の払拭を支援室での一押し。このモチベーションの高揚がポイント。
- ・3月のはじめに支援室が満杯になる信じられない状況である。
- ・今の学生は与えられたものを利用しようとする力がある。自分から開拓する力は少ないと思うが・・・。
- ◆ 教員力開発センターの流れがここに来ている。今は縮小してしまったが。
 - ・実践センターも独立したが、大学教員との接続をしていく必要がある。
 - ・1年次から実習に出ていると3年の後期当たりでモチベーションがぐっと高まる。それをベースに4年で鍛えていることで更にモチベーションが上がる。
 - ・教職支援室の存在は大きい。有料の講座もあるが利用者は減っている。添削だけではなく支援員の先生とのやりとりが支援室にはある。これが魅力になっているようだ。



解説書



教科書と指導書

支援室の内部（写真にはないが中央の長机の左側に担当実務家教員3名のデスク）

⑤地域コラボレーション演習・実習について（学生ボランティアに関すること）

- ・地域社会を重視した教員養成カリキュラムを作った。
 - 近隣への支援（学校ボランティア，学校への支援）
 - 学部の先生が地域へ出向く。（教科専門の教員を生かす）
- ・地域コラボレーション演習（1年生に開講）
 - 1単位
 - 教育委員会の先生の講義，放課後の小中学生の手伝い，検討会など全12時間ある意味教育委員会とのコラボである。
- ・地域コラボレーション実習（2年次から開講）
 - 1単位
 - ・積立型で，教育委員会では公民館との連携や弘前市の中でも遠隔地の子どもとかかわりをもったりする。
 - ・委員会の企画を学生が聞いて興味があったら参加。実習は30時間で1単位。

- グループウェアを立ち上げて大学，市内学校，教育委員会，学生をつないで休校の掲示や様々なイベントの提供をして情報が共有できるようにしている。先ほどの教育委員会からの提案を吟味して，よいものを取り上げる。
- サポーター実習は4年次で3年次の実習を終えた学生が，同じ学校に行くことが特徴。受け入れ先の学校の子どもとかなり深まった関係となる。
- コラボレーション実習は，入門期の学生で様々な体験ができる。30時間で1単位として最大4単位まで。
- グループウェアを活用しているので卒業生などは遠隔地からもアクセスで情報が共有できる。

<協議>

Q：受け入れ先への呼びかけは

- ・直接ネットを使って申し込む
- ・連携先とネットの範囲は弘前市内。
- ・学生が行く場合遠いところは交通費を出す。
- ・希望のある学校は大学に申し込んでもらい，ニーズがあった場合に行く。サポーター実習とは方向性が違う。この方向性の住み分けをきちんとする事は課題である。
- ・特別活動実習は公民館などからお願いされて，公民館の事業にお手伝いをするなどの事業だが，だんだん縮小になってきた。その流れが今は地域コラボレーション実習になってきた。学生の意識として山梨の意識はどうか
 - ・今まで例として途中棄権はない。山梨の様子を説明。
- ・雪の影響が弘前では大きい。
- ・弘前大学のボランティアセンターがある。外部からの依頼を見て，判断して学生に紹介するというシステムもある。また，震災のボランティアとして自主企画もあるが，これらは教育ボランティアとは少々違う。

Q：山梨での課題は

- ・学校の価値観と学生の価値観の違いか。
- ・学校によっては教育実習が終わってから来てほしいという場合もある。
- ・教育実習と違って様々な経験が年間を通して経験ができる。

<全体協議>

- ・各実習の成果についてはワークシートを綴るような形にしている。選択科目などで本日説明した科目で受講しない場合は抜けているものもある。一冊の冊子形式にはなっていない。
- ・附属学校園の副園長に教育実習の部門会議に入ってもらって共通理解を図っている。風通しがよくなっている。
- ・学生の教員志望動機で1年次は「理想の教員」で動いているが，4年次になるとレベルが上がって使命感や職業観をもって実習に臨んでいる。「なりたい」だけの意識から成長の足跡が伺える。

■ 模擬授業室の利用状況と新たな備品について

平成25年5月に利用開始となった模擬授業室は教育実習や学内の授業に活用されました。教育実習の事後アンケートを比べてみました。前期実習中は1回以上の使用率は52, 7%でしたが、後期実習中は、69, 6%の使用率になりました。約7割の学生が模擬授業室を使って教材作りや授業研究に活用したことがわかります。また後期では10回以上の使用率が10, 8%あり、だんだん学生の中にその存在が浸透してきているようです。マナーの悪さなど課題はありますが、学生の授業力向上の場として今後も活用をお願いします。

なお、中学校の国語、数学、理科、社会、英語の教師用指導書（附属中と甲府市内で使用している教科書）を特別予算で購入していただきました。高価なものなので鍵のかかる書庫にありますが、使用は可能です。今後の教材研究に活用してください。

■ 平成25年度教育ボランティア活動のご報告

平成25年度の教育ボランティア活動は、第2回教育ボランティア委員会で本年度の社会参加実習の単位認定会議を経て終了(受け入れ先によっては2月末まで活動するところもある)しました。

本年度の活動の概要をご報告します。

1 年間活動概要

- 教育ボランティア委員会（3回開催、メール会議1を含む）
 - ・年間活動計画、新規受入希望機関の審査、単位認定 他
- 学生運営委員会（7回開催）
 - ・ボランティアガイダンス・学生交流会・報告会の企画運営、ガイダンスブックの編集
- 前期ボランティアガイダンス 平成25年4月17日(水)
 - ・参加学生数 150名
 - ・受入先機関・学校数 19か所
- 学生交流会 平成25年6月26日(水)
 - ・講演 「教育ボランティアに期待すること」 講師 甲府市教育委員会 寺田 是 先生
 - ・グループ協議
- 後期ボランティアガイダンス 平成25年10月2日(水)
 - ・参加学生数 61名
 - ・受入先機関・学校数 15か所
- 教育ボランティア報告会 平成25年12月11日(水)
 - ・ボランティア体験発表
 - ・グループ協議及び発表

2 活動の状況

- (1) 活動者数 151名

- (2) 延べ活動者数(複数か所活動) 182名
(3) 受入先機関・学校数 67か所

3 主な活動内容

- 学校における授業中の活動・・・指導補助(TT 指導など), 特別支援教育補助
- 学校における授業以外の活動・・・放課後の学習指導補助, 部活動・学校行事の補助
- 学校以外の場での指導・・・子ども図書室運営, 教育ファーム, 中学生対象の自学講座

4 教育ボランティア活動の教育的価値

<学生へのアンケート調査結果>から

- 様々な個性をもった子どもの存在と, それへ対応することの必要性和難しさに気づくことができる。
- 教育実習とは異なり, 評価を伴わずに, ゆとりをもって定期的に子どもとふれあうことができるので, 教育の現場や子どもの実態をよりよく把握できる。
- 子どもへの言葉のかけ方, ほめ方, 叱り方の難しさや大切さなど, 子どもに対する言語的な関わりの重要性が理解できる。
- 子どもの生活行動面の実態や子ども像とのギャップなど, 生の姿を理解できる。
- 教師の子どもへの対応の仕方を見て, 子どもとの接し方や, コミュニケーションをとることの重要性を理解できる。

<受入機関(学校)へのアンケート調査結果>から

- 教職員以外の大人と触れ合う機会がもてる。担任とは違った存在として関わることの効果が期待される。
- 個別指導など個に応じたきめ細かい指導が可能となる。習熟度別指導や小グループ指導など指導形態の多様化が図れる。
- 学生の熱意や頑張りで活動が活性化する。
- 定期的に子どもに関わることで, 子どもは自分のために来てくれるという感覚を持つことができる。

■附属学校園の教育相談について

今年度より附属中学校と附属小学校の教育相談は、非常勤の相談員にお願いしました。

附属中学校を主体に月1~2回半日対応していただいておりますが、希望者が多くかなりの方が待機を余儀なくされている状態です。このような状態を改善するために、附属小・中学校から次年度の新規事業「教育相談」が1月に申請されました。センターとしてもさらなる協力体制をとっていきたいと思います。

■「地域連携 子どもと親と教師のための教育相談」・教育相談室に関するお知らせ

相談スタッフについて新規に登録された方も含め、現在来年度に向けてHPの相談スタッフ一覧を更新作業中です。新規登録の追加や相談日時の変更等ありましたら、2月中旬頃までに教育実践総合センター事務室まで電話、メールなどでお申し出ください。

■教育相談室に関するお知らせ

「教育相談室（L-428）」及び相談室の備品をどうぞご利用ください

「教育相談室」のご利用に際しましては、事前に附属教育実践総合センター事務室（J号館4F）にて空き状況を確認の上、ご予約ください。火曜日は附属教育実践総合センターが優先的に使用させていただきます。鍵はJ号館1階支援課にあります。利用された場合には、相談室内に置かれた使用簿及び報告書の記載をお願いします。

教育相談室の心理検査やソーシャルスキルを高める児童・生徒用のゲームなど備品も貸し出しております。借りる際には必ず使用ノートにご記入をお願いします。

これまでのセンターだよりの一部は、 <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/centerdayori.html> で見ることができます。